

827-2

新

清

俳諧資料カード

年代	文政7甲申
編者 (筆者)	寛山
書名	俳諧新鏡
備考	即至初編

(下垣内 蔵) ◦

序

玉粒〜おのほの香のたはらむ

うき志のり〜み鉏初め〜

つれ〜ゆふのたのしみ〜

も〜いさよのあはれ〜

あ〜いさよのあはれ〜

種も〜いさよのあはれ〜

も〜いさよのあはれ〜



下垣内 和入
會誌〇八三十一七九六五

夢ありきりくもさるるさきめりて
 ねむらむやあまゆきみね
 おめれきつた雁もれへは圃は
 かつらにひさしめあはれ
 夢るあまきりて
 ちりて

文政甲申 桃の日の後言

中野 楓後



叙

夫はみ嘯て信守をうらまのへ行をお祈り存を
 嘆せかめしは子徳をまいて心守りて
 人より嘆をうらまを憂うるを
 名を寛之云又崔公の号社子一導くるを
 汝如きあり日札よりあはれを同様にし
 要ありて年書写し
 海に友人の書や湖山畔芦の科元磨を
 争ひてくまきりて

志も例の善子情をけりし仲り共うしを云
して上本さくやそ形し師り曰名譽あねて
談憎の患あり新書あひし人子理けく或や
出物しのおまもとけりしあしぬを上棟
して末のそまてお務りの恥辱をゆきを并り
に憐さるさあひししよしよしよさうや友人
のせめを防くにししかししよしよの心さう
博士達の賢くよまてしよあま又玉を度と
争く人しに果しそしよしよしよしよしよ我

業の叶存りしましく生年う物然をもひしき
兵師の汝如をま漏きましくおるおあねてた
のめししよしよしよしよしよしよしよしよ
平南おれいあむしよしよしよしよしよしよ
しよしよに許たきしよしよしよの艱難仮名の
遠いあも覚来ならぬまおましよの祈も心と
くしよしよしよしよしよしよしよしよしよの田
井のあきししよしよしよしよしよしよしよしよ
むしよしよしよしよしよしよしよしよしよしよ

予... (faint vertical text)

如... (faint vertical text)

ホのえ... (faint vertical text)

松花... (faint vertical text)

寛雨誌



凡例

一 本書ハ諸學に足るものあり... (main text of the preface)

一 供若菜... (text block)

一 三島の傳... (text block)

初日

梁に海のたけ川日けうつる
相生の松にをさふ初日
あゝ玉の富士おきく初日出
かけ習さやう初日の鏡の色

葎星

旧山

文窓

武 斐文曉

初空

初空や鳥の思を小に
けつるにぬる川を雲はるる
たけそく化旅よを娘の子

武 斐雪羽

利水

金光

初鶏

初鶏や星の輝くを傍に桶

寛山

今朝春

雀さく油乃も尺せの今朝の春

仙 草葉々

四方春

波ももきくに雲もきく四方の春

龍 馬松

雲あもきくを以代の英

毛 今市北明

花の春

元日賀ハ大日本国王第一 神武天皇號ハ神景磐余彦

火出見尊 御時始ル 吳国の周惠王十七年に高き又吳王の賀ハ西漢の高祖に始るもつゝ惠王より高祖に四百六十年余後なり 故に本朝の正月祝賀ハ吳国にありしを尚先より有事なるを

岩水

岩水や磨るやうな 星のうら

菊賀

包井開

ころも何れもなき 拵拵

寛山

初手水

敏きくものいふを初手水

園生

大寒より十五日め立春の日 主水司若水を奉る朝餉
 のと紀 天子百廿九のややくと 立春ハ正月の季の始
 又元日ハ正月日の初なるゆへ年男是を汲之はみ井
 罷といふ若水を汲とききの事有り扱といふ男を
 汲て家内を清め水めし用ひ又茶を煮して
 梅干山椒を入れてちやくに汲て煮く香を祝ふ大
 福茶と云 又曰 人皇六十六代 村上天皇 天曆五年
 諸国疲病を有りて死するもの多し故に空也上人十二面観音
 を車に乘自り引歩み祝言く信する典茶を疫人に
 あそくゆつと良時に奉愈す 帝は是を若例と
 毎年元三月服しゆ万民是を 玉服と稱し

丁卯日 廿九日 月 大福茶

根松

屠蘇酒
 白散
 度障散

并傾の祥はきくやとわの研 代 雲葛 雄風
 初添乃きくやとわの屠蘇の益 羽 法 皆 笑

弘仁年中 嵯峨天皇御宇に始る 天子屠蘇酒

きよめきに未嫁の侍女をえしめて御茶子と名
 之茶子の香を後根の思ひに入て配膳にけしむ扱
 まより 主上に奉る一献屠蘇二献白散三献度障
 三々白とも同し元日四位二位五位三位六位藏人の役有り云

四方特

あえはちしと早くくはをくも四方并

香雪

元日寅の時 天子星の名を唱へ神明天道を敬ひ多
 万民安全土穀成就の御祈をばし天地四方を敬し

功りむい御兄大鷦鷯命オホニキノミコに奉らる。是氷室の由來
 氷のたえりの始なりと云ふ。又石尾をくみ氷の厚
 さにらるるを拵くく養す。ソレ是ハ後世の事と云
 大サキキノ命と云ふ事ハ 仁徳聖帝にて在るなり
 天皇御即位より八十七年正月十六日崩御 御壽百十歳
 和泉国百舌野に御葬り。是を大仙陵ト云風景之地なり

雀茅ノ戸田極乃翁の笛吹まき

寛山

国拙笛
 国拙笛

人皇十六代 應神天皇大和必芳野の宮へ 行幸の
 時同玉之川の里人一夜酒を献りて笛を吹唱唄ヲ
 祝奉る。其例にて今も来朝す。其所

天皇御即位より甲子年八月十五日崩御御壽百十歳 八幡宮ト

院拜礼

院系々人々此の御所へ参りて拜し奉る事なり

初曆

代統一々毎ら異くこよみなり

馬戸

曆閑

曆いらいとらりたり 亦乃り

加賀

赤子山

七曜曆

日死王常
ユウミ也



元方棚

とも又隅田へおけり 惠室棚

上チ

木田 豆島

牟徳神

南海の吹唱羅菴王の女牛頭天王の妻 婆梨賽女の
 糸を吉方に祝奈りて鏡 饌 雜煮多とを備る事なり

岩我沽

吉方ハあまのりも也節分より祭り十四日におきま
せつふ年正月のときハ大晦日よりまづる也
ソハ非ナリ
知来

懸想文

撰初西宮蛭兒太神宮の画像を納歩りん是を求
家々に多し有り大坂を以てハ西宮出張役所より出之
⑦近年ハソトハ非ナリ 文政七年今尚アリ
けさうゆゑ 女この猫に引き危 翠山

昆沙門經



かゝり系敷の町中をかき糝立るはしを以て去年
のうちに男女の隊のめをく有る事をつと
ぬものやうに言ふる人もあり 文章もも あつた
未婚の女ぬくやうに陰陽師の祝詞する事あり
くせけき一海より 附白化によりて意もなる

星佛賣

星佛うやうや 石のもせり 権 可丸

天子星を唱ふト云ふもいひてある事なり

繪双六

宝船画

双六をうれしむる鳥

花立

京都松原西洞院 丑条天徳社より 篇分て 白木小餅宝舟
禁裏へ献る是にありて 宝船の画を江戸にて賣出ゆ

御降

山より下りて 白木小餅

素堂

え三にあり 雨の事なり

門松
松乃内

門松をけしむる 松乃内 道房

又松を祀る事ハ七日の小松川の如くは又

洋連繩

名もくけしむる 日のあけ 傍わら

不奪

天照太神 天の岩門を出入りし 神道以直爲本 又左りたる
例として 繩ハ直の云 繩を御く不整とあるは
の芒端をあらはし 是實朴にして 飾らざるの意
故に直清算と云 神明の徳とす 一條繩と云 三
徳を具し 則ち 左をハキと云 左りに
素太と云 七五三と分ち出す 是天道十五の成を
左に素ハ天道左旋す 心をさす 附門松
洋連繩 付るをゆかり 素傍 抱ゆる ありとも

一雨了列々に勝るものにあらざれば物ありのを
季のものをかぎりとして春季にせよとも可分ら
非老く後人佳劣あつて齒固臭の如く書又
とくへ〜

蓬萊

遠く下氣目の届く奥座敷 暁掬月
蓬萊茶戸中も老らざるの乾 石山

饅

采 搥 搗栗 橙 搗排 棋子 搗 干拔 草薺
神馬藻 鮎 昆布 步鮑 山草 樸 松 竹 梅 靨
龜 藁 炭 げ新飾とて之を歳と有りて昔
より季よりせにあはし〜も亦の注連縄の如くよ
〜〜只の口松志免よりあつてふ〜事足〜

にて百も存し感して出づる 何卒海内の風土
是に石限あつ〜き雲の玉吹あつてお恵扱
を希此集に加金初学れ〜引に致〜

門神棚

鳥も来り神も来り戸の極 信山 玉宿

外家則 既ち〜注連縄を傍地明をより来ると名

齒固

鏡餅

た〜〜免を〜〜を〜〜と様まで 借 大ニ 余火
齒固や〜〜向此免のち〜〜 其 并 景山
け〜免の供神ハ内膳司御齒固ノ具を瓮に盛りて
音鎖門より奉る 大根一杯 饌 杯 瓜串刺 二杯 押鮎
ハイ猪完一杯 雜以 藤完一杯 暖赤以代之ハ方蓬萊ノ
以上七杯

又一の麩に餅大根搗ヲ盛トモ云 供御の鏡餅ハ
延喜帝の御時大掌會の供御に近江国切火野より
調貢す。又餅乃形をちまき草や鏡ト云又鏡饌と
一麩にとも故に大根をかみ草ともいふ

掛鯛

はなうにそとくせしや 傍鯛

寛山

飾鯛

俗
みらみ鯛
と云

昔より榎易西成郡今宮邑より 朝役とて毎年
調貢す。鯛ハ二尾を口含めて引らして傍
口と含せしむる言事一ツとして後を食
上二人より百姓にゆきて心一致にして太平海
を表す。名と云傳ハは事ソノ代に始りや

御厨子所供御人榎易々郡今宮莊輩證文
從往古於五畿七道致賣買之業今停止園
泊交易往及之煩可備進日次供御

祇園社駕輿了朝役共於他所企新儀依成
他家披宣從方々相懸非分裸役太不可然
所詮弥爲諸役免除可致 專

公役旨可被下知者也

天氣如此悉之云快

弘治三年四月十日

左中辨

文永年中足利家證文傳來ス

又天正年ノ下知狀ニ諸百代村井氏ノ書ニ曰

祇園社大宮駕輿了榎津因今宮神人致賣買之
業事任 御代々繪旨若所下知々了朝役神
之狀如件

松牛もゆくられと。そらに

齒固にちりひて祝ひ喰す。ちり屋。大内は雜煮
をいふおもしろうけぬ。京師又後因て三ヶ日
そらにて祝喰す。饌菜大根芋昆布田作り
兎牛肩 鰯 串貝 金子イリスあを味喰汁とく
考る。ちりちり家の風にて雜煮の具減少あり

太箸

姉の笑のふりに余の子の笑聲チリ
たたりた初チリきりなぬの教チリ 老 尊 玉 芝

むらゝ丸竹を利い竹のりてとれをあやう。松よ
祝ひのふりて祝ひのふりて祝ひのふりて祝ひのふりて

以先姑

言安のイサ怒り枚子やひ先チリ先
かゝのイサ肝けおあり 糰糰始 寛山
お徳くそ事足る。唐のひめえり 全

先安年中頃吟
アリヨリ人未知

諸虫に以先チリけめ此事を飛馬姑と浪新チリなり飛る
ハ曆も馬のりそ先チリと有人凡生者ものに食あり
去て命を全チリす。事あり。況や人のよとて米
の糰物を大切に祝ひさ。むら夫食衣住ハ人の
三枝の室あり。やすせん。定家々の選集志むい
一 百人一首も巻次に 天智天皇御製秋の田
の御哥ハ采の事ハ。ておけ亦あり。此も考るを
及。耕他ヤ。穀を貢。先 待安座。す
ま。め。ひ。を。考。る。ひ。ひ。百。計。の。考。考。を。考。

きよみよふ西宮ありてあや 天子さくち氏いさか
武まをけしめる氏ともに見くにさひ安松に命
のお預する事一嬉しくもまことさむ屋かを娘
娘有りの文字になほと近松の九事の戯作一十二
月よあつらうとてを世とせしやと年一男女更互の
事あつらふ多る石村の俳諧ありたり一我の
の常い只米の炊物を祓ふりて白化す年一
あまの事ハま心傳へて神道家陰陽家の秘
契ありて人あつらひに事あつらうとて

附 近松長門歌、唐京、佳
在言作者、祖之宗保、年
上百廿五、年文、三、法、上、下、
相國寺長老、園茶、一、抱子、
ハ、カ、井、作、錦江、女、月、年、一

着衣始

際とらて葉あたる影をききて始
驚動に嘆拂 志の志衣始

上 名末 文仙
日 相生 美増

影衣を吉日をえそと着初る事と

稻積

いと与

い神つもの中塗へにうらる東山

房 川下 聖行

え新宮の時よ終る執考とつておては年れい
出さるて志あつらひ古賦りくこと去之又二日のるの舞
舞をいよとあり稲い吾舞の能儀あり

初夢

初夢や多めてきつぬ 姉妹

菊賀

え新宮の時よ終る執考とつておては年れい
出さるて志あつらひ古賦りくこと去之又二日のるの舞
舞をいよとあり稲い吾舞の能儀あり

るはあまのく大内ハ勿論 後内もあまの事なり

龍剪

はせうやう戸被にあつて下流

玉笠

京都にて玄采を著て花のやうにたをさるるを寶と云り
江中より羊が森まら酒をうるあり大坊とて宝引
とて始せ兼るふく一或ハ板の傍に玉吹をくを
あつるに縁糸を七糸又十二すくを白一筋ハ枕を踏
付をさきききを引く一糸引つ引枕の付る縁にあり
とるものハ人形葉子をまらせる是とて宝引
ト云

寶引

宝引ハ心はくくの玉の宮

石加 六夕 松花

福ひまや灯籠のまらる再の庭

根 廿六 王危

过宝引ろくど穴一ちねの舟の子とももの如戯る

傀儡師

傀儡吹おめや佛の出とてし

廿六 停之

戒通し

按品西ノ宮末社百太支神を祖ハ始元年曆不詳 吳國
海のまら平城にかゝらん一とて陣子けくことと巡
一末をん美人を他り城上にまら一故ハ單子君を
作る是傀儡の始りト云

大黒舞

日のたかゆ。大黒舞の以中うた

寛山

春駒

たる駒や地根を踏ふるおめ

廿六 春駒

楳笏荒陵山四天王寺敬田院ハ景佛法策初之聖聖場にして
施藥院療病院悲田院ノ四院之内療病悲田の二院ハ
當山の廓外にあるゆへ垣外の早始るは垣外者著
今四ヶ所の者としてて乞食の頭領なりは者共は結の
以中を著し之味綿をむき祝儀をうへいぬぬあり米
砂を乞女ハ編笠を著し之味綿より糸をさくらを指合
してついに立て物と乞食をを遣と云又七傷の馬
の頭に鈴を付太鼓三弦を奏し踊りて物を乞食を
春駒年として乞食を著し信馬樂の事似ありは
附録 三月に前季いとしてておぬに餅を乞食中をお懸
に分て長史、御事、つよは長史を田舎をハ穢多村の
名とせし如しあり 坊主の頭を乞食長史の号あれえ

ある村を長史としてハ非なり又云

正月松の内ハ物業のの門口にまを馬して右長史の方
お存に續をを著し 其本中ハ大忌業も追々のつに
さきさき書付を取往きより足ゆる如く張屋之とを
ぬせれとして布院ハ沸しつよとつよ又おせぐの心や
とつと 実業として 仕切れ又とめて乞食つよは同
大禮の注ありは是なりぬれとも

よらけ少我のつよを餅の札

此のハ京都の事くまは江戸の事とてすハ非なり

鳥追

鳥追ヤ親子とてくぬ土を
鳥あひし 鳥修り実乃人なり
此 東一
末之

江戸外なり

猿曳

森ハむちのゆきたつまよ猿曳し
さゝのゆきの猿にものさふ日さき
猿曳れ凡呂あまき日くん

甲

猛高
笠雪
李堂

万歳

万歳やむー河のあゝゝゝ
万歳をむらぬるやむらぬる

万歳醒井
上七
ホミ
五右

大和国平部郡万代村よりありて 此系震殿の上庭上
に〜万歳樂を奏し〜まより諸家在所にお
まて候〜日〜は始え久延に〜あはれま〜
因東に〜ハ三河のよより所〜へ出〜祝舞之
ちわ万歳よりハけ〜後の事〜と〜ふあ〜れを
家康公御入国のに始り〜
附 天壽住吉

舞樂名

千秋樂 万歳樂 奏平樂 貴徳樂 拾翠樂 北常樂 勇勇勝

万秋樂 安城樂 河水樂 十天樂 廻盃樂 鳥島樂 陵王

還城樂 北庭樂 武徳樂 登天樂 吉春樂 天人樂 甘洲

延喜樂 慶雲樂 兼和樂 兼秋樂 感秋樂 宗明樂 蘇合

史官樂 平靈樂 海音樂 竹林樂 越殿樂 兼平樂 廻鶴

寺進樂 寺球樂 曇頭樂 相府蓮 春揚柳 一徳橋 柳々

長慶樂 採桑老 青海波 迦陵頻 納曾利 河南浦 春庭

老君子 蘇利子 柳花苑 胡飲酒 酒明子 白桂

桃李花 賀王恩 眞嵩仙 新棘鞆 王照君 小娘子 輪羞

春鶯啁 退宿徳 振舞、賀王 菩薩 林歌 胡蝶

綾切 安摩 倍臚 二舞 白濱 拍鉞 池久

皇仁 夙踏 鷄徳 杖南 技頭 皇慶 鞞 散手

鉦氣禪脫 新羅陵王 獲草者 三臺鹽 下略

万歳樂を介し独狂言或ハ躍の歌ハ糸樂よりして
くさるの者はく免

再注春駒ハ白馬の節令に在るひの事と云
き遠ハ耕化の程を果さざる候事と云

手毬

思ふに如ハ口をくさるものもあらぬ

大海

吳国武帝の代の悪人蚩尤といふもの頭を
折擲の事秘ひし羽子八目の玉といふ

羽子

たふ糸つて今日うのたふ神塗本履
やう羽子巾乙女扱の秘事所

京田河東

毫 齊 文月
言 飛 瓶

ゆりく

是も蚩尤の骸を赤糸にてくさるものありくを被ハその
逆風有り

破魔弓

たふゆじんまきりるの代の秘事所

真交

その騎弓は去ゆしと輪をまらるしを射て
たふゆれれんまきりるの代の秘事所

弓始

はくさるに去つまる波下ゆけ

按所 三田露王

業の弓遠の矢をうつて悪魔降伏の祈りて射る事と云

馬騎初

騎そきたにあゆむくまひや買出年

白川如月

飛馬始

船乗初

かきまきとえ供かゝり物出お孫
来その中水字にきくく百千多

寛笑
眠石

湯殿始

翠笠をくわ湯を始の雨因乃折
初ゆらに心れ垢もあ

寛光
東長兔月

藏開

始ゆを先ッあや〜ららひき

白兔

吉書始

書初や書のあるりをもまき及

車三

筆始

とくたや未れきも書のり

栄橘

謡初言

舞入る〜もあり謡を危

南聖

波音のゆらぬ初〜い初

燕子

初賣_言

初賣の中〜屋入ゆる淀屋橋

寛山

諸賣買あれもまじり五穀を計一とする大坂
堂の米市ハち〜淀屋橋通〜あり〜例
は〜今も初市ハ淀屋橋〜にて相場を定む
結〜を七次大徳の春の日此中に

我名を核めり〜月

〜立日中以信長〜米屋を市船〜の〜米穀を
〜買す〜年〜家業〜を〜住〜街〜
接印〜堀ありて世渡の〜官施

初の内は着に用をを云 遠来傍を喰核より非あり

若餅

いものち申 祿有ら 一斗 許 信加 大ニ 其仙
若餅 を搗多うとりに碎りて 此 廿八 風居

三日のうちに搗まると又空明の水をそはくもよ

年男

うー男 勤められし 新左衛門 元カ 平川 素石

年男といふ節分に豆を形又着衣を扱七草は年一ちとす若

松の内

さゆけしと 家出ハ多きも ねのち

昔牛

年礼

年礼に依りて 依りて 依りて 依りて

上毛 太田 金ト

大臣大雀

左大臣ハ 四日

右大臣ハ 五日

大臣に任ずる人 大納言の下 弁小納言
左の弁 藤原の大臣ハ 朱墨基盤を用ゆ 其日可行
中を 穢事と云ふ 天跡に 達し け時に 獲
甘栗の使と云ふ事あり 六位系人 中門より
家司と云ふ 令奉 折櫃 二合に 盛一合 後 大ニ
牙栗 大ハ 者 出さる 振に すすりて 行黒に 入ふ 舎人 二人
衣冠して 相見られ 仕下 二人 荒座を 着て 是を 持
藏人 青色の 袍を 着し 對の 肩に ありて 進む

二宮食言

有る頃より前傳の從者をも出でて四倍物を祓ふ
 すべし奉古より御備不用 志の所に二月廿二日聖天
 會と出り有りていさき方信ハスえの 附に 皇太子ハ
 法藏のハ般外しては 又皇國に佛法をさく免
 むして諸宗の寂初有り 法相宗 三論宗 俱舍宗 成實宗
 華嚴宗 律宗 天台 聖德太子 真言 空海 禪 柔道 淨土 法然
淨土新宗 門徒 淨土新宗 日蓮上人 淨土 法然上人
 の御余光あり故に 御降誕日を賀し奉りてハ後
 一ハかゝる一 附 俗に物をさしよりハ一頃に於ては傳
 くることハハ傳々供の訛るる也。又任吉室の市の神
 事も傳々供有り。十日直會祭と云るハ自見せし
 ゆへ説楷のものも有る也。やと坊補せし有り
 ありふりの神と柳子及の神とありてそま歌より任安

松籬 七

百の... 加賀

大業

土竜寺

たわら子 い

案内ありて... 坪の内

正 柳風

年哉の夕生海角を深くして獲一納鹽十能ありて
 多きを獲ぬ 場坪の内を 去るハ内よりとらと爲の
 以んぬとやと之新しき 引物ありて地を合
 ころころもちの土を執るる... ⑤ ありて有ハ非之
 と言ハ...

白馬籠 七



宝龜六年庚戌正月七日 光仁天皇 場梅院の安殿に...
 事をもりしやみ佐と内殿に高の青馬と進入 兵部者土佐

以て勝馬を遊ス 又紫宸殿に高座ありて御
政事方々後 日花門より引入櫻橋より西の中宮を
ひきこもり 日放西のま戸ひて 上御所流ありて月花
門へ牽出也 馬ハ陽物とて春ハ春の色之け日白馬とを
つれを 邪氣を除とつて 正月ハ陽セハ小陽の教を
三七廿一足引ぐせうもとなり 六年右 仁明天皇
兼和元年 甲子正月七日 豊樂殿より行ると云 隋 後漢の
明帝のとき 天皇因より一切經を白馬に負せてあり 早
春に入洛ス丈より 任法流布して 安全と治る 吉例に
よりて 皇国より 白馬を早春に大舟へ入れり云之

子日遊

小松引

貴儀はおや へんてつてつてか

椿齋

北極俱庐州の人ハ子年の夢ありと云ふより 北方ハ
子之招ハ十年の夢ありと云ふと 子日の御於に松
をひきて 御玉蘇を授けり 祝しる 寛平八丙辰年 始元と云

人日 昔 人乃日ハ 眞意ありてあり 昔 文氣

元日 鶏 二日 狗 三日 猪 四日 羊 五日 牛 六日 馬 七日 人

若菜 海土の子もささくひりて 芥菜を搗 武 琴江

七種 十二種 宇多天皇 寛平二庚戌年 始て 横加荒原郡 生田のうら

中尾村の農民生田の濱より 一丁布と 仲海産の若菜

を採て調貢一奉よりまよりお續三百余年後
 永承の以源平兵乱みて中統せしを文明年中
 本願寺八代蓮如上人徑回のときは舊例を申上
 られ今も十二月廿五日生田の海底より若菜を申尾
 村の農民より採て日村泉隆寺より京都西六条
 花屋町佛照寺へ賜ふはちより鏡餅を添て奉獻す
 送るまより 禁裏工 献ル 又 醍醐天皇延喜十一
 年 幸未正月七日後院より七種を供 杖根 蕪 餅 薺
 田平子 薺 薺 以上 又 村上天皇天曆四庚戌年
 女御安子 藤原師輔公の御女 若菜十二種を奉らる 磯菜
 若松 薺 薺 根白草 蕪 薺 薺 薺 薺 薺 薺 薺 薺
 葵 以上 今凡下用七種 薺 薺 薺 薺 薺 薺 薺
 佛座 以上 如け若菜とてそのくは川あり其故事とを

初めはあやの④ 五世通年た用あり ⑤ 仲侍をあらした
 出書も本意をぬを略之し書たり 恐るるも念
 大内ニテ行ゆ小事を用あり 仲侍た、よめく不届之
 又田平子ト佛座ト物といふも非あり 是よりあは先
 初書の伝きもより伝を 先哲さくち氏工やあは
 出書の俗傳の年くさるをあるなり 古来より季
 考にあはる 有歌の伝も知れしとて新、彩名目
 を出し 春の種名の節或は秋の系あはる矣あり 形
 しく初んをふたりしとて忘るる上りの付合る名
 入るるも傳せり 八元をらしとて其事とを

七草

七草を名上るるにたすの悪をん

上毛 赤まり 里川

福留堂

二十一日
二十一日
二十一日

寛山

横津国豊嶋郡箕面山滝安寺吉祥院の観音堂にて
終正會行レテ七日夜福留を突之當山の本殿ハ福德
大辨文天女にて日本寂初出現の靈地なり江湖竹生
山巖勢如巖巒相扇江寫是を日本四所の弁天と云
板けとみはきく毎年年のうらに一寸角の板
を諸必一出す板に各々玉不名考又ハソウの
目を有くを書分山初後お係世話人方、後、
備えり山一持系する之をれを富管之りて突之
當りの人、福德所今中ちれ株 子木秤祖釋
あるの所をあらえんは御金印の守護札を信々
るものハカるゝゝお昌出世すゝと云

廿采橋川神夏七日

大和国吉野子守勝手大明神 祭神 愛鬘余子天孫
降臨倍從三十三神の存也 神事 神事の式ハ、
野山、櫻乃々く以て七月犬峯登山セ、
をみせり

御齋會 八日

垣武天皇 延暦二十一年正月 金光明最初王經を撰
る

御終法 八日

村上天皇應和ニニ成年大内真言院におのく金剛
界胎藏界を修し御躰の加持をたまはる
隔年に東寺 仁和寺 叅内して勤之云

女叙位 八日



女に位階を叙せし事あり内待所の被宜し
東童といふものあり 行幸の時ハ姫とて馬に
侍せしなり三つ子を用ひむ故帝女なり
けいよの女叙位の時ハ五位を降いて三人ともに
同一名をむめしとて之をハ 天子れちりあり
といふ由緒あり事とて名ハ紀朝臣季明と
いふ事あり例ありとて 又 アツミハウコ 吾妻堅子ト書ト云

女至録賜 八日



参議 解史云に兼明門の内幄の座にて女王に
ろくをとりかみしとて

常陸常神 廿

ねんし 亥のし ものをむとち事 ホウ一 座

常陸鹿嶋大明神のあの日女にけしとて人教あり
ものそぬの男のるを布のそりに書付神あり
にむを 辨すしとて自然にむとてそとて
をかけあひのやんかきとてそとて男か付
あり 辨すしとて 文婦とてそとて事とて 附云
たし事にかりてむしき事とてそとて伝はる

縣 呂 十日 あつて石鳥博子はそは日吉

上 信鳥曉

諸国の奉行代友をて 大内、百させしれ
まゝに任ぬふ事とあつて、田舎の事

踏哥 古言
拵の花

天武天皇御宇葦所々を巡りて得る葉採
うゝいかさつゝ又抄書の藤まきを互て囀ら
あつせらるる若殿と人なると抄ふさるる事あり
板ハ志の夜年緘の名跡とて月に新し洛中
を抄ひてとらしむる六位の弄人に高巾子

をさるるまにかさりの物か所の事と付とる
そは物ぬよ色くの造り草をを付とるよう
①② あかともは海のうしてあつてとらしむる事を
注せらるるつゝあつて ねあられ走らるる事と
の砂を沓して踏立をりあつてを荒走とつて
教走とつてあつてとらしむる事

女踏哥 十六日

持統天皇の御宇に始りて女とて男とて
とらるる事とあつてとらしむる事

延年講 古言

夜不寝講

〜人の暮らさるゝ所をわたり

夜神の御講 古日夜神とて言ふよりと申すもの仕度にて
抄ひ書けり又ハ室川 分曾輝 双六なる〜て修修の
抄ひの明〜新所のの生土神一集修一社頭の〜むとの
火をう〜抄 抄ゆり 小豆粥を焼く〜修〜又生土神一
を〜若ハ〜抄〜清〜空地邊邊を〜
町内の門松修〜を〜
有洞粥を〜

左義長 古長

爆竹

三徳寺

歳招 招

御宗尊 ミツトウ

禁裏 ミヤ

丸くを〜月ヲ〜
ち〜月ハ入〜
月〜

猪肴

寛志

坂本坊

門松は途繩を〜
ち〜
わ〜
む〜
月ハ〜

綱曳 曳

〜
綱曳ヲ〜

寛山

左

撰津國西成郡難波村牛頭天王網曳神奉産子
 の人々南北に分例志て大塚を以合て引勝る
 方ハ其年福を以五穀豊饒と云々網を以て
 村中家別に其業を其めま中ハ之抱翁あり
 け一はくゆく二尺まひりくおのり物く又云
 紙ををさしりてありま嘯く引くは事月玉
 豊後新池田にもあり云々も早ハ未見

御薪カキ喜
 庭竈

宇多天皇 寛平元年 始文武の官人進之宮内省ニ納ルガ

江調粥

小豆粥
 粥、木
 カユ秋

加印はるた災いの治るる者局

其 博集和音

此如本同時に始 今日小豆粥をも天狗を免れと
 邪鬼を除ト云 又作膏粥ト云ハ 供御七種の粥
 あり 猪米一計五升 粟 黍 稗 芥子 胡麻 小豆
 各五升 鹽四升 以かゆを煮く 余りの木子
 小豆以煮くを以り 神に供ておて女の尻を
 さらせぬあり 是にうれぬ女ハ終男子を
 産くより 禁中に今もあまふりて
 以すねひをく 住まぬ女ハ終を
 あり 是を切るの太 粥杖とも云なり

削^ナ 楓^キ

冬^{フユ}の^ノ羽^ハゆ^にに^ゆら^れる^り胡^コ々^々

寛山

江戸にて吉日より其の門戸の軒に侍るこいふる故
く^ハ予^ハ不知^レ上方^ノく^ハは^ハ事^ハ不見^レ 祇園のけり
りけにおもひてせし事^ハく^ハ

有^ア會^イ祭^サ 吉^キ



尾^オ易^イ中^{チユウ}葛^{カク}郡^{クニ} 国^{クニ}奇^キ神^シ社^{シャ}祭^サ神^{カミ} 未考 祭^サ禮^{レイ}八^{ハチ}前^{ゼン}日^{ニチ}に

往^イ還^{エン}の^ノ符^フを^を立^たて^て神^{カミ}友^{トモ}とも^もく^くを^を付^け身^ミの^ノ命^{ノチ}
を^を人^{ヒト}と^とし^して^て体^タ浴^{ヨク}を^をせ^せ俣^ヘ衣^イを^を着^き神^{カミ}友^{トモ}
連^レ乃^ハ丈^ハ担^ハ板^{イタ}に^に木^キと^と傷^やり^しる^る庵^{アト}丁^{チヨウ}生^{ナマ}負^ヲ箸^シを^を並^な
又^{マタ}人^{ヒト}形^{カタ}を^を作^{つく}り^し右^{ミダ}捕^とる^る人^{ヒト}の^ノ代^{しろ}り^して^ては^は板^{イタ}

の^のせ^せて^て人^{ヒト}を^を倒^たし^して^て居^ゐり^し一^一夜^ヤ明^ア敷^シ神^{カミ}友^{トモ}
を^を神^{カミ}友^{トモ}より^{より}下^{くだ}す^す土^{ツチ}と^と餅^{モチ}の^のく^く傷^やり^しる^る
人^{ヒト}に^に脊^セ負^ヲせ^せ後^{ノチ}を^を世^セを^を首^{ウタ}に^にく^く返^かす^す
走^はて^て必^{かならず}倒^たして^て氣^キ絶^たす^す好^{この}く^く有^あて^て血^{ケツ}氣^キに^に去^さ
猪^{イノ}子^コの^の方^{カタ}に^に去^さる^るそ^そた^たく^くと^とれ^れる^る所^{ところ}に^に堀^{ほり}と^と築^{つく}
ち^ちく^く土^{ツチ}餅^{モチ}を^を油^{アブ}ひ^ひけ^け神^{カミ}友^{トモ}社^{シャ}家^カに^に侍^まへ^へ神^{カミ}友^{トモ}
す^す。 瑞^{ミズ}々^々き^き休^{やす}ま^まゆ^ゆ人^{ヒト}と^とし^して^ては^はき^きぬ

ト^ト田^タ祭^サ 吉
平^{ヘイ}園^{エン}粥^{シユク}



河^カ内^ネ国^{クニ}河^カ内^ネ郡^{クニ}平^{ヘイ}園^{エン}神^{カミ}社^{シャ}祭^サ神^{カミ} 天^{テン}津^{ジン}兒^エ屋^ヤ根^ネ命^{ノチ} 姫^{ヒメ}大^{ダイ}神^{カミ}
武^ブ甕^ヱ槌^ヰ命^{ノチ} 齋^{サイ}主^{シュ}命^{ノチ} 四^シ座^ザ之^ノ 御^ミ饌^{ケン}殿^{テン}に^に大^{ダイ}釜^クを^をす^すえ

米小豆を入十四日夜より焼く神供にして扱ふの
盆の上に盛るる寺斗の量廿四斗に五石の粒
枳を煮ち十五日乾土敷成粒の餅ありてまじりて
一夜に冷く入て灰一口宛爰を刻て中の切ゆの多
少によりて吉凶を占ふ也其後の上中下を
祓友を辨にまじりてを農氏等廿廿ゆりて
まじりてに依り諸務を為す

賭コ弓三杏



清和天皇貞觀二庚辰年正月十八日左右の大將射手
の羹をこめて終て食をこめて 天子弓場殿に
出御アリテ左近衛右近衛左兵衛右兵衛四府の言人

射之負方ハ爵酒を行じ勝方ハ舞樂を奏し
大々々述衛の管領をれを事終て大將より射手
に食をこめて是をこめてあり

厄神祭九日



山城国男山石清水八幡宮模社厄除神祭神素盞
尊 正月十九日諸人系訪りて蘇民將來の神札を
うけて改り門口をくはを降魔厄除トス

骨正月廿日

淋 くるが祓正月やた乃 祓 中山 挑笑

松の内十五日の命今に用ひて 鯛鮒を骨を

春日より水と湧りてわづらひたるまて煮りて並世日
の節會に右のあひに大根牛房大豆さゆの螺串貝
すか余りある品を入れて煮る。夫をわねともふゆ養之
これをつめのふけともふゆ養之月ともふゆなり

吉田清後五日

女節分



山城国洛東吉田山神樂園唯一宗源殿日本神祇首領之
政所にしへ天照皇太神を始め三千余座勧請之清玉也
叔きよまろくくくく六十年越の夜神宮に厄塚を築中央の
後をまを林をま厄神をまあり七五三繩をふ村を十九日
三元の紐あり中央に大麻左右に幣十六本立天津柱

国津柱著生柱を神官行ひ段々厄神塚より一封を
出しへ庭上の火に焼ゆく塚を取拂くくま人時有り
貴姓不多す社の西に火根取くく有諸人炬を振く
孤系すくあくくお時女も連くく系くくと女節分と云

丹告毒



仁壽殿にて文人に題をぬり詩を作しゆりふけ節會
保元年中信西の中行しより後よりと云

御忌忌五日



京都東山花頂山智恩院より浄土宗祖師源空贈號

法然上人の法事ありけり三ヶの寺も行くを
はしき治中洛介もも来訪の人々も法然上人の
子まゝに衣鉢を授け玉成ありて後死を
出さるるに多く人の目も付ゆる来訪も
隆を降す神も法人のもてて年々盛りす
是を依に所忌小社とす

節振舞 定是

法中の節舞を振ひて世をなす

并原素暁

親類知己をお互に呼合に宴す事

卯杖 上旬
卯槌

持統天皇三年正月万國を朝せし上卯杖白大倉人
寮より杖八十奉りてむのりの木を三尺三寸に切上
又東宮始左右ノ兵衛府造物所よりも奉りて云
卯ノ方さしたる松椿抑をて結合せぬむのまゝとす
ちりそを突玉ひて松竹の向を卯の方に向ひ歩行
事しちりてすあゆませぬの所を千歳坂ト云フ
又
絲所より卯槌を奉りて若人等を徒瓦昼の御帳
に踏付角柱に掛て細木を立込打てて槌の末ゆり
五尺ちりり 槌の木にて造り四角に削り進来ハ丸くす
つ大内に不限昔ハ諸家にも進せし事とす

水

祝 定是

人々の御陰をすくむ水紋

下 大 蘭 山

皆をちりしるもの水をかめてねん事之りつのもろ
いふあつゆへやむ未考 知職是を指南せよ

初寅急寺日

初寅急寺日 初寅急寺日 初寅急寺日

寛山

番下

あつゆへやむ未考 知職是を指南せよ

被 厚其 素水

洛北松尾山鞍馬寺ハ延暦十六年 帝太美藤伊勢人草創本尊
毘沙門天王諸人懸あつゆへやむ未考 知職是を指南せよ
宇宮千景伏見初寅急寺日 山中の清くらけとつふあつゆへ
谷をたつて向ふのふる年より番をあらすも番跡を入れ
ゆへに上へ候をたつて後のもつにたつて燧石を入れてあつゆへ

初卯祭

摂津國任吉郡任吉大神社祭神一ノ宮底筒男命 二ノ宮
中筒男命 三ノ宮表筒男命 四ノ宮神功皇后 四社

神功皇后紀十一年辛卯四月廿三日造宮ト云昔上神代より在り
御神一ノ人皇十代 崇神天皇御宇 岸の雄松の下

に降臨在りて三百十七年 佐氣長足姫命 神功皇后に詔し
ては地に移を画りして 任吉國ト号まれり任吉日

神号ありりれりし卯年卯月卯日神詔有しニヨリ
年中卯日毎ニ神事アリ 又海上をちりぬ御神

ちりて諸国よりの奉詣日と稱多し 附 社勢津守家
ハ瓊々杵尊十七代の孫 田袋見宿禰津守氏ト改寛政

年迄七十三代正續ありといふ外ニ 神人三百余家アリ

具足餅割

十九日廿日廿日

治癒する所也乎々々々の解也

歌流

元日に勝りて十九日に入りて廿日廿月に就味等々
とせむいハ廿日もつり本按未考

天ハハハ愛ハハ力ハハ

小娘に似あせとて愛餅くぬ

武川口梅香

煎餅繁

吳國江東の俗所の多うしてせき有るのをばるは
家からにさうて穀鬼を拂くやそそもの事
計用のちのぬに有るとも可あつて

店節 定号

等節のさうとて一店ありし

寛山

去年中の交易諸商内の利損諸雜費示して勘定
す。事有り 附 宝亀四年の以穀物の價定とて公筆益
ハソウの以より出まるとも不記 清和天皇貞觀三年
初て曆をばるとしてけ順の事とて未考

初芝居

二の登 狂言

萬治元 戊戌 年十二月朔日河波の国の人からつて偶人を
そと井きて洞進しなれりけ時竹田出雲と云れを
せりそ後寛文二 寅 年大坂にあつて初に接換戲場
を願ひて與りし 享保十一 酉 年五月五日竹田近江
と受領を改其時三田郎一月古年十月受領して二代

近江とあり寛保二年九月廿九日死なれど其方平助儀の
 後竹田近江と成日三年京都におゐりかゝるに
 興行すけとき希儀とて子供を出しおけ親言を
 始む是の如き一づいの後り之を後慶長年中
 名古倉山におまをてそのの末孫少辨とて芝居を以
 け者の骨子ともありて其の如き寛永年中京々
 所即とてその太坂へ下り都踊を教て芝居を以て
 けとてその女流を禁りて慶安五年に於て
 名代座本道具立髪衣裳をも定りて
 初芝居といふに元正月に初りて一ハ後者出代して
 初て藤屋一助を初見世とて春狂言を二の代りと
 して小を考一とて初芝居ハ冬季ありて一増山并
 又ハ冬月後者初見世を初非基といふに 紙式ハ其の
 正月の祝儀を以てすを足れとては春季にさして
 一ハ初芝居ありて十二月に揃てて春季とれと
 初芝居春初りて定りて杜撰かと思ふあり
 我の骨子ハかゝる不定定有る歌を求て句他ありて
 雑々混々せしもの多しありては 和布苅神事 禁刻 有
 四方辨 ハ元日 あり 是先哲の一失に似て倍云一火虚万是寧の
 ありてあり 夫一年初ハ正月日の初ハ日時の初ハ子の時
 昼夜十二時の始リハ一にて子之二十九にて丑之二十九、寅之四九
 卯之五九、辰之六九、巳あり 是を朝の六時ト云又夕の一九ハ
 午之九未之三元申之九酉之九戌之九亥あり 是を夕の
 六時ト云 朝タとて又日の出より六時の間を昼ト云
 日の入りより六時を夜ト云 是を夜ト云 子時一九にて

又ハ冬月後者初見世を初非基といふに 紙式ハ其の
 正月の祝儀を以てすを足れとては春季にさして
 一ハ初芝居ありて十二月に揃てて春季とれと
 初芝居春初りて定りて杜撰かと思ふあり
 我の骨子ハかゝる不定定有る歌を求て句他ありて
 雑々混々せしもの多しありては 和布苅神事 禁刻 有
 四方辨 ハ元日 あり 是先哲の一失に似て倍云一火虚万是寧の
 ありてあり 夫一年初ハ正月日の初ハ日時の初ハ子の時
 昼夜十二時の始リハ一にて子之二十九にて丑之二十九、寅之四九
 卯之五九、辰之六九、巳あり 是を朝の六時ト云又夕の一九ハ
 午之九未之三元申之九酉之九戌之九亥あり 是を夕の
 六時ト云 朝タとて又日の出より六時の間を昼ト云
 日の入りより六時を夜ト云 是を夜ト云 子時一九にて

九ツ時と定む己時を六の九ツゆへ六九辛四を上略して四時
とす夕時と午に元一とてま四時に出る故に和布芥
神夏ハ我門とて六歳旦に古事一ハ神事ハ則

和布芥 元日丑時 神事

長布赤間 下向阿弥陀寺と云ふ所より遠あり
新風はらんぬれ和布芥の類の先

寛山

豊前国隼人神社祭神ハ地神三代天津彦火瓊杵尊ノ
御子火酸芥命ニ在也御算彦火火出見尊也いひめて
守護~~~~之故に隼人神社と云々同因小倉
より東門司と云ふ所より此後地より後ハ三方に山を
負ふ所ハ海より長門の矢嶋に回リ社地の外民家
あり廻廊門の内には隼人大明神と頼あり其門の外
石階十四五十歩と云ハ二千三も云々て其余ハ海中とあり

秘神事ハ十二月廿三日の夜中 海を隔て年一云里程
向ふの矢嶋の民家の上に幣のめき物立之 白羽の旗の矢嶋
と云々家の主をほめ別火して一七昼夜新
筵に座し 神事するとき松明を持神役を勤め
神人と共に海より隼人稚海藻を一袋茹て上
事一三夜之四夜月ハ新くけて上故に三篠半の神夏
と云ふなり 是夜毎に潮左右へ分とて之ハ神役に
當りて民人も其ゆえを不知とす 是ハ夜々社系
考これとも神事の希々合ふれた聖年九品を花
後して 是夜を十二月大日に立上りて 赤らる筈に帰
る一 是日を待居るに何用と問へば 大海日
一ハ舟を海より出させ 又神事の時刻ハ泊船する
と云く 灯を掲げて 静に波を待てる事と云ふ

遙拜せしう只炬の光りのるるのふゆのまてていふる

行ひくあしをく舞ひ舞ひてく^④長門豊

浦住吉明神の神人と双方一時に彼石橋をりるる

左に居て右の方の神人色のゆめをりるるゆめを

かぬあし自然と得く二橋よるる漸く照るる

あ社の非格あし先世の別あし流あしをりるる

そりあ社の炬火の光りるる社頭及い海上の

かぬあしの灯りてく^⑤中畧えぬあ社の神供り

豊浦住吉大神宮ハ一宮ト申之神木ト云楠樟あり

海辺より一里を隔つ予^⑥多傍のそりるる事りて人

に因ふに不知とす然ハ隼人神社をりるの事りて

村里^⑦森林をりる一里を隔つる平地の住吉の灯

又下の園の沖に千珠満珠とす小嶋有り上代

神功皇后是所を伏せり免れ御国入御の時波干

の珠をけしく並ぶるそりるる小平をりるる海をり

るもあしる事りて人あれて舟もりる一ノ宮

住吉神社右之時造營ト云

東風

たらしそり戸只たらし^⑧まをり窓^⑨東山玉川

あしれりる中安治川をりるるあし^⑩東山丁

春ハ東風夏ハ南風秋ハ西風冬ハ北風

浮氷

あしれりる日をもりるる^⑪かすか^⑫下番山松

あしれりるるのあしれりるる日をもりるる^⑬奇其乙

凍解

余寒

雪解

春此雪

泠雪

舟鳥乃わらびく 飛登るよのきり
閑舟 信如

后町の清のまゆゆる 余さうらふ事
冬ニ蔓秀 三嘉
氷くくさうぬきけの 飯日山
三嘉 氷川 江河

氷炒くを 向けくも 春のき
武 五月一呈
さうのゆきき月も 思ふ
華 困和
はあのをきあて 思くも 月夜
雪交

あはゆきき 雪のき
武 サツ不玉

若草

春の草

新草

初草

草

若草 河波 柳秀

春の草 思志

新草 武 華 寛里

初草 元 雄

草 暉 榮

放れ草 武 仙大 葛粉

若草 武 華 崇

草 武 寛 山

每玉祭 言

華神

模扇住吉の 模社 祭神 天鳥舟命 猿田彦大神

鹽土老翁 三座

七州雜七州

七草にたる年一由きく鳥うす
七草の中上にもなる悪太郎
さる安の婦もさる年七表を

武
寛江
寛山

若菜沽六日

つく年もかたつてある年あうや
つくとくもさる年あうや若菜賣

チ
九花如鐘
徳道

蕎麥賣六日

村さく村とさるくさる川を依
たるきさる年石よあくとく如豆袋

吟秋
抑也

磯菜摘

晴印く磯路の山平ワをさる法み

如瓢

水雲採

宇宙七草く

信品
共山

供若菜・公根元ハ水雲より前洋と合観あり
海藻を草とも菜とも名付所務あり

神馬草ホタテ 麻尾菜ヒジキ 石花菜トコロカイ 鶏冠菜トサカ 鹿角菜ツノカタ 昆布コブ
和布ワカメ 磯帯アライメ 荒和布ワカメ 海羅ウミノ 磯素麵ウミノ 有と涼限あり

又詭譎に秘傳に交り一宛を依論作の小細を年を
伊文は伊文とあつて初学の事と深き
礼物をし欲あり。務あり切初る者を作せ生
源本々に入る年あつて初学のくく徒ゆふ
よき師に依り依り。或ハ依り依り依り
自さに上も名人きくつふ論抄の中ハ初学より方
あり又假名依り依り。初学度文の賢人きく
あり我門の草ハ自化を依り依り。道徳の名師に随
ありて依り依り依り。初学依り依り。依り依り依り

鶏腸菜 ヨメガハネ

後よりよき世に侍りて徳を成す一は乃の達
人と有り玉つと早き喜ひ事にてさるるに



土筆

房の氣に在るを月と見ゆ
春は是の多た船のさるるを
休もよき家や四より皆つ
梅もぬ氣も有れをさるるを
再洗ふ侍りに梅や色くくし

立理

暁春

上老 太田 賢美

寒胤

イカ 六 把柳

楮梅

白梅

紅梅

鏡梅

豊後梅

信濃梅

曾我梅

飛梅

麓梅

卧竜梅

須广梅

野梅

かぐさるるあられおお世の月日ひさ
はあの子や人さく訪つた梅白く
去のさるる梅に梅のさるるをさるる月
まはさるる尾のさるるをさるる花
梅よるるこれあるるの杖をさるる
らるるさるるや局をさるる
あま日のひさるるをさるるを梅 蒼
つむさるるにさるるの心信やあのを
さるるに氣のさるるをさるる梅白く
梅よるるのさるるをさるるをさるる
梅よるるのさるるをさるるをさるる
さるるをさるるをさるるをさるる
梅よるるのさるるをさるるをさるる

上老 南 讀書

仙大 因 人

鷹 彦

伊豆 川南 立 綱

相馬 子 文 明

豊前 中 車 吼 愛

寺 天 羽 元 嘯

河内 丹 南 服 朝

主 三 千 丸

主 小 三 号 名

大 若 彦 彦

早探

拙乃後も走るるをうめ花

湖山

一重梅

梅のあつや山乃法作のあり自後

上毛 相生如雪

八重梅

梅の自りよふに去をあせり

河上 不雲

雪隠梅

梅のそとをそとくくあつあつ

因形 鳥取 友

六英梅

梅のそとをそとくくあつあつ

千五 倉米 都友

計数梅

梅のそとをそとくくあつあつ

一哉

計数梅

梅のそとをそとくくあつあつ

武 秩父 嶺松

計数梅

梅のそとをそとくくあつあつ

上毛 半嶺

計数梅

梅のそとをそとくくあつあつ

下井 中川 笠窓

白梅

梅のそとをそとくくあつあつ

上毛 子言 兔月

白梅

梅のそとをそとくくあつあつ

武 松坂 苔石

白梅

梅のそとをそとくくあつあつ

武 日次 博景

白梅

梅のそとをそとくくあつあつ

出羽 赤松 卧遊

白梅

梅のそとをそとくくあつあつ

元曉

白梅

梅のそとをそとくくあつあつ

此 碓氷

白梅

梅のそとをそとくくあつあつ

此 市龍

白梅

梅のそとをそとくくあつあつ

此 旧山

白梅

梅のそとをそとくくあつあつ

此 寛笑

白梅

梅のそとをそとくくあつあつ

舟渡 福名 五葉

又妙を折れりてはとよ妙妙

白梅の花更みぬ月あつた

人乃ち来て梅に花をせし梅の花

梅は月とて梅は月とて梅は月

月は梅に花をぬれぬ月は梅

梅は梅の花をぬれぬ月は梅

梅は梅に花をぬれぬ月は梅

梅をぬれぬ月は梅に花をぬれぬ

梅は梅に花をぬれぬ月は梅

梅は梅に花をぬれぬ月は梅

梅は梅に花をぬれぬ月は梅

鳥十

武 倉梅守

下 倉吳山

素一

里水

杏樹

武 千住鯉角

一向

去 粟起風

元江

武 介三平房

音谷

音柳

玉柳

猶柳

采柳

枝垂柳

岩柳

芽柳

取まゆりのちまきをきりては

又て折るをぬれぬ月は梅

又て折るをぬれぬ月は梅

又て折るをぬれぬ月は梅

又て折るをぬれぬ月は梅

又て折るをぬれぬ月は梅

又て折るをぬれぬ月は梅

又て折るをぬれぬ月は梅

又て折るをぬれぬ月は梅

又て折るをぬれぬ月は梅

又て折るをぬれぬ月は梅

又て折るをぬれぬ月は梅

音柳

玉柳

猶柳

采柳

枝垂柳

岩柳

芽柳

翠山

朝車

松月

藍水

一花

青 主 藤 采 雲 雲

池邊にて竹とさうらう、柳の如

き柳の如くして延る日如く

き柳や鯉の如く紫の如く

際うら 赤きを護る月如く

舟は多き柳の如くに流るる

雨の早の心赤の如く先より

折られて赤の如く春の如く

赤の如く先見して柳の如く

有る如くたれ柳の如く吹日

赤の如く柳の如く、紫の如く

さうらうの如く、紫の如く

ちの如く、紫の如く、紫の如く

武 田 井 折

吟 松

機 三 言 一 水

因 鳥 猪 松

出 廣 白 川

上 木 田 毛 々

、 雷 竹 和

、 木 田 玉 笑

、 除 赤

、 木 田 捷 記

笑 岩 暮 潮

上 在 力 卒 砂 丈

瀬よりと出船の如く川柳

る月の如く赤の如く

船の如く赤の如く

赤の如く赤の如く

赤の如く赤の如く

赤の如く赤の如く

赤の如く赤の如く

赤の如く赤の如く

赤の如く赤の如く

赤の如く赤の如く

赤の如く赤の如く

赤の如く赤の如く

花 香

相 浦 賀 盛 耳

上 五 月 旗

上 安 尊 本 夢

常 浦 暮 要

美 作 如 鏡

下 行 英 毛

常 美 磨

、 如 雲

、 川 月 松

、 岩 笑

、 墨 折

せいのあまきくひさき 玉柳、 及来

青糸巾 舟尾てある。貸しを返 常 春耕

ゆき止うぐさるをせきせき 井か 常 行々 法 弘

まき柳 巾 油くさんせきる。あのか 常 幸 吹 糸



扇賣 せいのち記たきうなる 拂扇 歌洲

年玉扇をうり買す

福壽州 九日

余のち花のうらな朝ハ初しんく是景 祿乃おしに昇くく福壽州

木芽 山寺やとちしをんて 皆木の芽 謝堂

終る此福よく 止て木の芽ゆく 房 大畑 音房

下萌 碑を掲げ 存くんと 善きえる 文雲庵

まきを借ても 春さうり 竹の葉しも 初れさる。 うらうの丹山 赤きくをいふさうり

菘菜 クキ

菜大根をしの莖の延びる事

苜菜

だらりとした葉入り枯れる水菜

根

貴耳

生菜

京都 壬生野の名産なり一株に千筋の葉を生一とせき一尺くわぬと香ありて毒を

近年江戸にて

藍菜

ふきの

下駄乃との冷な葉の莖ふきの葉を

下

琴風

寛光

芥

根白草

女芥 エガ

芥を搦めを裾から紙皮をうぬ
甲の玉を咬つてつむ根芥が
掘つてしる水の下垂芥をむ

松杞

三葉芥

竹甲のらちちくるや三葉芥を

嵐山

芥子菜

松花
若緑
十漁花
ちり紙

ぬり多に 滝のたきやねの花 房山 梶清流
杉の若及上の鏡よりぬり糸 下井 前原金莖
赤塗りのもろ舟の出きてす川の花 駿加 津津梅嵐
砂路のこもる庭をくくや杏乃花
御矢をさぐる翁あり松乃花
賦をかきて形童子あり雲の花 山吉 長原南喬
汲て形るゆにうらや若をま 尾原 三鳥雲

若芝

若芝をすりぬゆのそし矢ぬ
若志をや豆腐を運ぶ南禅寺
若芝や美奈乃なる丹波道
若芝に清川初遊の歌
若芝やいづる山清の草

山井皮
辛皮

恒精にかかりくや孝小性 武 終久金書
暇くさをも辛皮煮たにさらんを
寛山

野蘿蔔

遠島濱名納豆紀島若山徑山寺味噌とくに漬合て
喰さり或ハ座禪豆をくも茶味にささり



海苔
水衣苔
十六嶋苔
紫苔
浅中苔

おののちや天氣のなる仲の春
苔のよち余りてゐにぬるぬ
まのりやのゆるぬる破の波
のり破徒に月のまつくせを
ゆておごるや自然と保る海の色

香山
下井 川連枝
武 十 孤竹
十五 牧也
兼百斎

加太苔

櫻苔

水鏡寺苔

紅葉苔

海髮

麻尾菜

暖

夕武まき千脊中をうらや波の巻

武川口金河

あゝうや馬にゆゑうゝ三度笠

武古池曉照

暖まぬや子猿の橋を傳ふ

元雄

麗

うらやうやゆらけゆる嶺峩丸太

下市東水
文宣庵

麗や頸所に通ゆる波風

出八 嶺峨々羅

うらやうや向の山に芥乃巻

下市東水
文宣庵

長閑

わらうや上もゆきまのゆる

武八尋寛理

そよよや春半に糸きる張子ハ

志々 玉莢

のゆるやうも春切の鈴

志々 錦糸

そよよの甲ももるも果る糸

志々 秀山

糸のそよんをやそ西に衣胸して

志々 寛山

のゆるやあけあけに指燈

志々 中吳

そよよやまきりくまゆる砂河原

下市東水
積山

春比日

智恩院の傘をさるる春比日

遠馬 雨十

さうれ日中碓のよのぬむ女あ

旭菜

たるの江戸もておろし山を
碑の跡うけえあるはらうか

古友
聖峯

風光

形智思を捨ふ目先平風光
常りにあるはる勢中ゆのむらゝ

此
千住三巴
華千里橋

春の目

身開

松うけのむらさきてあけり成の目

出羽
鹿子梁

吟如る。枚方船中たるの月

上
下雷路丈

秋の篠ハ月あがり春の夜も

セウ
後々 貴耳

牛岩をそそて居る中けはれ月

春枝
砂光

朧月

はありのおよろつやうお月

里仙

氷きくふるうらさる春の月

寛雅
麻介

おろけをむしりあがる春の月

三
文景
花々

翠のれきふ江口の君を御月

我月

さくら坂乃ちきりあまら月

サカ
うら 盈耳

宮を島に廻廊せしむる月

北山

くさむれく竹田のてふお月

狸谷

里丸の地をかく後月あけ

下
清嶋

おろろ月細糸するのゆえる月

好猿

十島に廓てはるお月

雀基

坊風をのほけりお月

寛山

春の月ハ籠にて事足りぬけり其夏ハ灯をともて極め
御一秋ハ山海川島に御あり冬ハるの傍よりわらて候一

春風

狩衣の袂に隣りて中もろれうせ

毎一矢の弦ききき一季の傍

春ぬ中や帘きききあらのに

花ゆかれとつやうきききくもの

浮世にををちあきききけるのかせ

はははや美條くわゆる南良の町

本陣にあらきき紅幕下春の冷

百姓のまよぬくひ中けりゆめ

其由

畔芦

下 佐倉躬崔

栄我

其 美峯

松調

寛山

全

陽然

毛 畚玉笑

暮潮

寛笑

秀山

市竜

房加 天津梅月

文鏡

棋局 三田 菊危

三河 四方 群嶋

焚水

賀 衣雲

寛志

たのむをけしきりそり破割松

松の上たをろくせえゆるまろぬが

やすくも海傍り中けりゆめ

ははは中撥て隣りて中けりゆめ

又平く糸にゆるき一奏のうき

たろ風中日くさ一門に人たろを

春風中矢のぬり女まき小川島

海をを渡りなけかりらけや央の

たろぬくや菜飯のうゆる女川村

けりくせや糸中仔細のく百姓危

たろぬくや菓子くるる案にをわし

からなまの痛くくぬ中けりゆめ

遠坂の雲のけりあやとる海の

長刀代袋乃赤一けのうせ

けのうせやるるぬけの二刺赤尾

赤尾のうせのけのうせの葉名紅

たるけのうせのうせのうせの上

叶の人のふぬい白一赤のけ

舞有るてま喰馬けけのけ

赤尾のふせをよるや春此風

の法をうらつ楯のかのやのけ

けあののふせのうせの風

五日ちとる二尺のうせのけ

五季 申梅枝

一屈

芦尺

伊賀 上ノ音柿

真 柳倉陽季

七季 吉之掃石

武 年千代

武 丸地鳥蓐

虎山

春風ハ光りあつて優なり夏の風ハ清く去て涼
秋風ハ艶なりとて蒸くぬる風ハ冷てさや

春 雨

塾 鴉

遠 相良文朗社

伯 孫 破 曉

セツ 三田 一 水

赤 一 奪

寛 志

茅 竹 庭

大 川 柳

浪 花

左 寛 山

左 音 牛

新

春のあ光白髪ぬるをて挿入る利

たるるるあやもとるるる母の足

又尺のうせも 都乃のうせよのうせの

たるるのやたるるの付一貝念

秀のあやもあつて守に守守牌

けの雨や癖の付一居るるる

春のうせをふんれた眼の雨

夕のうせのうせのうせのうせ

玄賓乃細工尺を折つるの雨

逆のうせも 釘乃あつてはけの雨

西陣ハ静なまよ敷屋の雨

史ハのうせにかなせりるるる

隣らうあつて候あつてはけの雨

くくゆれう強めりゆきぬ春の百 老番今 得三
 賢慧かゝたにまゝ一人もあつげの雨
 けいのも茶臼のまはれまゝはまをり
 来り雨戸母と入て形とと世相
 市就 鹿水

春の雨ハそのまゝりて静え 夏の女立ハそのまゝり
 秋のまゝ淋しくあられなり冬の雨ハ強くて淋

霞

ゆつ〜ゆつ〜考〜ゆつ〜を影の影あけぬ
 中〜ゆつ〜も影で形〜ゆつ〜二子おぬ
 九十九里ゆつ〜ゆつ〜ゆつ〜ゆつ〜ゆつ〜ゆつ〜
 浅る形ゆつ〜ゆつ〜ゆつ〜ゆつ〜ゆつ〜ゆつ〜
 系海をえんぬれを早〜ゆつ〜ゆつ〜
 船る〜ゆつ〜無庫の浦中初かすも
 夢るにゆつ〜ゆつ〜ゆつ〜ゆつ〜ゆつ〜ゆつ〜
 夕〜ゆつ〜ゆつ〜ゆつ〜ゆつ〜ゆつ〜ゆつ〜
 物竿のゆつ〜ゆつ〜ゆつ〜ゆつ〜ゆつ〜ゆつ〜
 船のゆつ〜ゆつ〜ゆつ〜ゆつ〜ゆつ〜ゆつ〜
 小川をゆつ〜ゆつ〜ゆつ〜ゆつ〜ゆつ〜ゆつ〜
 障のゆつ〜ゆつ〜ゆつ〜ゆつ〜ゆつ〜ゆつ〜
 馬〜ゆつ〜ゆつ〜ゆつ〜ゆつ〜ゆつ〜ゆつ〜
 山越ゆつ〜ゆつ〜ゆつ〜ゆつ〜ゆつ〜ゆつ〜

不王 鯉曉
 芦雪 羽場可丸
 下田喜朝
 元雄
 眠石
 尼草寛笑
 斐收羅
 大和 奈良 日晃山
 老 太田 松久
 武 十住 有全
 信房 吉仙
 文隠
 相生 楠丸
 武 十文 曉
 異月

鞭打て一ちなるけにそあきなり

櫻庵

や降りやほいぢらと漕くよめの音

鷺船

その送るよ神や室はの氣うはえ

津

あかりたおしも焼くぬまね系

房

夕のまみそ屋焚餅を焼いり

相良

一羽つとを成を吐りり 修の御答

洪水

あふらする家やそ成の戻はくき

高野山

そ成らもそそそ 貧女の灯

寛山

向きくは成なるり 京の山

左

春ハ霧 夏ハ雪 秋ハ霧 冬ハ霜

水氣の立ちのるに降るにあき

春の水

水ぬむ

再はふ人もあたらふそら水

月流めくそぬさるそ成乃あ

あめ方く流そり戸けるのそら

為人に出すそ水ぬぬむそ

まあそのもそそそ水ぬむ

春のあ念念新てんそそりの

目をそそそそたれそ音あり春水

たろれ水うくよ 腫

春ハ雪解あつてそそそ 夏ハ洞て清

秋ハ流て短くそそそ 冬ハ湯て濁そ



支水の本辨ハ六角有りとの思ひ故に故に思ひしを
天地四方の六合に思ひたり又冬ハ北方玄武にあつて
水の沸湧の節にて水徳トモソナリ 玄に武まの
ゆへ亀を玄武ト云亀甲ハ六角有り又水晶石を
至つて割れた自然ト六角に有る又西圖を
書にも自然と傳り 氷の形ト六角すとのを
水の象ハ六角有り又潮ハ三角と云ふも
性を甲ト云ふ火土金を以て培つてすれど三角の象
ありとも也油ハ惣て平丸有りとの有りとも別
丸ト云ふを考へても水ハ六角有り物に遠く
まゝと云ふ知識考定し多し又日満千ハ
凡六十里を界し海より凡六十尋下ハ何国も
清水とも水ハ重し潮ハ軽きゆえなる也

舟に大坂に着て以て西の大河と云ふ川水増り
よもて濁りの流ありおのりしと云ふも安治
川口を流るの辺りにて船より方余をとり
舟の中を流るも思ふやうに大坂を飛ぶと云ふ
るも大坂界を告げし流をとり大坂にのみ
流るも海流の方ハ高く水ハ大坂を流る海
流より流るなり又大坂の潮のさけを考へて川水
ハ大坂の潮のさけより仲に流るなり海流
ゆへ流るなり水の上を流るなり大坂川口を
六丁も上安治川流るなり大坂川口を六丁
上大坂の川を大坂東の邊りより流るなり是
等の事より水の本辨を定案せしむるなり高利

ありきともおのりやうなるわさるゝと云ふ 世の穢者水
 潮の本流の意考ありて後ありくせは梅雨のり
 及 なるるハ卷中乃社選癖案教を案者下し
 近ハ履杖をいしをいしをいしハ依字を信するはみ
 教道志ありと希ふとくも有り候早ハ早又くも
 乃ハオカシ老をれと地獄修行もね近ハ依之別後下居
 号を 松月院文晁寛山居士と小石に編く江戸淺草
 妙寺町萬年山祝言寺境内ハ三十七戈のとる表札を
 出ハるるりそりて後布せハ後人々列本ありて然
 著述せしハ互古をい語れる無改正ハ形勢よく
 後代と初学の人のくもくも久に助信あり。居
 信てにさふ 舟中そを投事ありて春水と終
 一とる海ハるるを采とてよく海せんま水とる。

此らにけりて 蘇に阿蘭陀人の海中を水をとるを
 ゆ人に何万里乃海上も水に不自在奇一とて是
 等の類ひなきなり

春の海

けの海はるるけ実より 歌石 南呂
 ゆきあふえおほれさうと春の海 武 美川 雲川
 ゆの 梅乃るるるぬれまの海 房房 安事 木山

春の水をうみ海に因

春ハ山 佐保姫 山 笑

まらちかんとて人もあつ春の山 下 真瀛洲
 春の心 船のうらりたりりり 健鯉
 おあらしに目をまをすおあらしの心 土浦 元明

菫に似たりと云ふ言乃ちと云

一花草

人も功カクきよりのよ一花草

寛山

模範能勢郡中宿野村 久佐々神社 俗に草々明神と云
其境内に寒中芽生して葉は青の如く莖三寸をりて
立春のど白梅に似たる花一莖に一輪長く夏節に裂
ち枯れて叢中に生るるを又根を他地へ移し植れば
よく生るるをみて不葉は風土の寄有り 寛文年
菅家の雲客來りてはのひりときき承りてて
天子、敕、敷覽ありて尚書に 勅命し記せし
久のふと之詠一華異ひて天下春を知りては
六事ありて又宿野名産土益ハ 人皇二十二代
雄略天皇十七年三月土師人連等に詔して朝夕

供御を盛ぬる清墨を献ぐむ故に土師の連
の祖者筭 創製之未救々村より奉る 少升ハ宿野村の
舊名也 是亦詠傳るものなり之頃補せし

牛王出曹

人々の祀事の中を

後正會

我々を踏くあやうし牛王出

寛山

摂津國四天王寺 六時堂にあめく元日より後正會を
行ひ十五日夜堂前に大篝を焚て 牛王宝印を柳
の枝に付て出ま 法人多し信て民家の守護す
俗に牛王出と云ふ 牛王ハ堂とあり又 生土とあり
つれも文字のうらちをもつて自老の注なりを一
利有之者んも左あり 温槃經云七日大

早川日毎にふるる 谷の水 身今 其指
 早川に若くはゆきをのりしれり 舟飛 蕉政
 早川に流をぬきわたり 水 甲 梅香
 早川に流をぬきわたり 早雲寺 松中
 早川に流をぬきわたり 早雲寺 常 元躬
 早川に流をぬきわたり 早雲寺 此 涼月
 早川に流をぬきわたり 早雲寺 下 了川
 早川に流をぬきわたり 早雲寺 上 茶桂
 早川に流をぬきわたり 早雲寺 出 甫雪
 早川に流をぬきわたり 早雲寺 寛山

核局西成郡 長柄の田圃に名木の梅花六葩あり
 毎年は謀此樹に元朝鶴来啼と云

早鳥

早鳥の記 早鳥の記 早鳥の記 早鳥の記 早鳥の記 早鳥の記 早鳥の記 早鳥の記 早鳥の記 早鳥の記

早鳥の記 早鳥の記 早鳥の記 早鳥の記 早鳥の記 早鳥の記 早鳥の記 早鳥の記 早鳥の記 早鳥の記

百十鳥

百十鳥の記 百十鳥の記 百十鳥の記 百十鳥の記 百十鳥の記 百十鳥の記 百十鳥の記 百十鳥の記 百十鳥の記 百十鳥の記

沈沈くくハを舟のまのなやう又ハ啼くくくく西とあーきを
白化すをー

水鳥囀

あまのまきや伏しを。 飯をんて 金川 佐治
しらまのちえう。 けり早の屋。 寛笑

瀬魚采

うやまをきりけり月のみまむら 三河 吉田 浦夕

魚昇米

孝れを感して氷出るうをを 上毛 伊集 松里

白魚

摺れ合くと水も有ゆか魚のぬ 上毛 上野 元明
とけりけり日にけりけり 藤 下毛 黒羽 鴉明

あらうけや藤を香をけりの先 武 大森 猛高
縁やこのまにきりもせや 日 岩淵 龜 哲

白魚とる 鱧たけりや 七日 月 一 瓢
白魚とる 火ハまのくちへけり 遠麻 甘子 如水

して美味のまじり上敷夕喰くとも他まじりうまいのまじり
 しく飯成を午日に神と初後せしあはれしきり花社の
 神祕ハ初る事一あはれしきり早あち付の難後あり

摩耶祭 初午日

撰州菟原郡 佛母摩耶山 切利天上寺 天竺の法道仙人草創と云
 上基村の坂口に 焰魔堂あり 是より十八丁をりて石階百九十八段
 して二王門にあり 大堂十二百 觀世音ハ初午の日学陰とて七氏
 各相馬を引て 遊幸あり

水間寺祭 日

和泉國 人皇四代表聖武天皇神龜二年二月十一日
 行基に勅命ありて 建立ありし 馬頭觀音を安んずる信之
 初午の日を縁日とし 近江本が寺ありて 是に教へ

際所は 助ありて 是より 寛山

花供養 餅配

大和國 芳野郡 吉笠山 子守勝平大明神祭神 正月七日ノ日所
 藏王大権現三座 觀音彌勒勢至 役行者依亦化現 鏡餅を供て 懺法方書 花供方
万法方ト云 天台宗 兩方交會して 花供懺法を修む 是より 花供方 天竺の
 一鴈 是を修む 一山ハ 破面一 是より 花供一 是を 誠寺
 あり 里へくと 又藏王三座一の鳥居 細く柱あり 是より 奥に有
 又足指とて 所より 是王堂あり 是より 役行者 母公の像あり 又大舉山上本堂

とよ三座く己上九辨各石擁不をん行者の作人山上本堂の左脇
に行者日本をん自作の像七尺ありとあるを案するに役行者寛政年
千百辛年法會時
神變大菩薩は令徽八日本丹三の言山之吉野六田より三里程振を
ぬりぬけて下の花王にゆるまより山上まで七里と云ふに發行
場あり小天上大天上のまゝを赤お金剛杖にゆると道路に控
を殊教を首にけり法をゆかにをり首に掛又六腰に修丹
ぬくが二つを登山す。鐘掛押倉岩飛石東西ノ視胎内潜
護ノ窟行道石なるあり物吉野川ノ壱壱離をまゝのり山上
にゆるまては坊毎にゆるあり豊ちけり坊毎に教ありあり
登山日行のり多人に法事畢く松やむゆるまに於て
まゆ故に金嶽ハ古来より圓せしものあり依之俗云あつらひ
舟の井のうら純修舟のゆるまにあつて大華山毘盧のゆるま
攀入の赤下に記 扱もちるゆるまのゆるまは枝居西成郡濱村

清淨瑠璃山源光寺三昧院融通大念佛浄土宗一派の本寺也 天平

勝室年中 聖武帝勅令に大信正行基の采基 日本火坑の
初光に大坂七基所のまゝ俗云は寺より日东成教平野
のり日家教中ち大源山諸佛護念院大念佛寺の本寺之鏡併
を傳ふ又當寺より赤廣一草二葉を鏡併に傳へ吉野之送
るを傳へちりやく修りかやく後破る又三月の令式も
大念仏寺より役仕あり又二月彼年中日松尾日天王寺にて
大念佛ありけり吉野より大念仏寺上人修者の役仕あり
是を太良と云ふ太良加護ありを名よと云ふりてお互の更
を太良と云ふ駕籠と云ふ

春日御祭 古事記



大和國三笠山下春日大明神祭神武麿雄命鹿嶋 齋王神香取

天津兒屋根命中臣 万機千姬天照 四座御祭八 清和天皇貞

觀元日卯十月九日に始ル或曰 人王三十九代 天智天皇御代大藏冠

鎌足公に始テ茂氏を賜る本居常陸國に生ゆ敵に鹿嶋

大明神と祀りたりと云後 元明天皇和銅元戊申年二月七日

三笠山上に遷より後 称徳天皇神護慶雲二年申年四月五日

今の地へ迂りたりと云の式ハ加茂と目し又 文徳天皇

嘉祥三庚午年 帝土守護又ハ后妃夫人の急病のためと云

閑院左大臣冬嗣公申によりて日御宇 仁成元年南都より

京都小鹽山の下大原野へ遷りゆゆるに神夏春日と同一

藤氏の后宮より二月十月にも是を行ひたりと云る

大原野祭 上旬日

秋奠中十日

釋祭

秋菜

オキマツリ

まろくつ舞やまろくつて作内系ありと云

賢白き人をとくやなき

武

川口雷窓

寛成

文武天皇大室元辛丑年二月大嘗寮に周孔子并十哲老子

をその像をくけし納言文章博士に孝経 礼記毛詩尚書

周易左傳 論語をくを講せし先少少又詩賦をくきて祀と云

供物ハ聰明として 餅白 栗黄朝東を傳くを傳くを傳く

を明日物爰を杯に盛く 養人おのれ餉のまへに進む又人

の養人 御午水の百の方此養子ありてあまハ何物そくつふ

を時文屋の司の身をもつておのれ秋奠の祭をくしてすく

指て所を中くもつてくつてくつてくつてくつてくつてくつて

奠幣 先師を禮すくつて秋ハ 光孝天皇仁和二年始

新年祭

トシゴト祭

四日

文武天皇大室四年二月本室四年ハ慶雲元年也神社館にて日本六十八
三千百三十三座の以非々を大内にて奉りせり豊年を祈り
とや又大倭 住吉 比叡 大神 恩智 意富 葛木 鴨 日前 一之行之

埴使

大和國畝火山神社祭神 神功皇后より御埴使二月朔日夕駕
者比折にありお教書をも改 天香火山の社司と云に被を修
て後山に入口に神書をありみ天真名井の水とてゆを清
土を三個半よりて翌二日に仰りけり天平元年を修り新年
祭の供物を盛りけり山の大を返すハ 神武天皇八十平元

をいふ心 自作一のひて諸神をまつも天下を治るあり
今世八國亦慈明寺山にて埴をまつも

鬼押



伊勢国安濃津國府惠日山觀音寺本尊如意輪觀音和銅三年
出興ト云イ寺にて毎年二月一日未明に修正會ありて終りに堂内
にて螺貝を吹 木鼓を乱個にうてを出番の成子然々音行
を拵てエりく 舞して野のれたはるに續て供人も強島
叔鬼に有る者に木作の大釘を拵る又後年の忠教十人
變にて拵るお中別院持の弟をかかると又異所門人
大教子 琴柱をわけて立出よとて鬼追者白雲を拵り
教十人へ彼鬼を切らむと云はれり

春分の主人辛の日に入り七日目丁の日に終る。その中の四日めを時正
 とのふ屋夜等分なる。又都卒天に靈樹あり花開き七日
 七夜にして八月申をを生くる。七夜は熟を以て七日の節
 梵天帝釈天と聚り凡人の善悪を記せりゆゑに長根
 を修す。事々龍樹菩薩の記に在るよしとす

社 日戌白

所のまはに燒くさうなる。社日壬午

信満 其儒

春分に通きツキエ主日の日なり則立春の後より月の戌なり社主神
 とく松栢栗を以て掩て土倉の土を多り土穀の多を饒を祈
 りたり六日海を共王氏の子勾龍氏佐玉と織水を拂ふ神なり

社翁雨日



治龍早酒音

ちやうめい酒を之布ふに春分なり也 此 河口川里
 治龍早酒なりと知りし好の濟り 竹妓

社日戌のまはに焼くさうなる。社日壬午
 龍ハみぢれともきこくげ牛も再竹のを白蛇よりを
 してとて竹を招き多き一んを牛一又龍ハ蛭蚓の太きとを
 するなりんがふ不再なり菜名土竜ト云又蛇ハへひト云菜名
 こそハ白蛇鳥蛇ト云又正月の節ある土於キハ田前云

二月堂行
一日
三日

薪ノ能

若狭畔水七日

水取辰



近世に戸戯作の繪双帯をよみてハ前連をてめちやあつ
かき事一又性すいぐ不行すいぐあひなくカキをエと流廻
加名して知まらに傳へし先會歎の奉りゆらに諸音鼻
まにさせくハいふも下存すや常事ゆらに善をす先
悪をあらま書くもハ中流の遠方り徳道とよに能
考つて邪乃にハくもやうにまらきりのあはれは法の
皇國に弘りハ 聖德皇太子の御建立して 聖武天皇御
再建志ありゆらに佛法ハ 王道をたられ一日も立ちど
れを佛法のそまきハあらま勿辨るもそ所の 帝王ハ
新深しせのふより記れり 空海最謹ハ 神國に生れ
皇國の五教を喰ひ是の佛法をうそけしハ 國恩を
忘御一 末世にふり佛法の破成せし事を惜りゆらハ
神道に佛法を混交して兩部の法興立一 夫より諸宗の

祖師達よりくま変化の法をよましそ世人の迷ふにたひ
いふく言通させしむ 教する今現世をくまらハ 嗚を吐
れまらまきまらハ 教する佛の外の佛法ハ 思自
とらる 秘に高世ハ 寺僧者の格式叙次を毎ハ 行の院下何
の廟所又ハ 寺僧の多かを神一 此に流儀を傳へハ 昔の
者もハ 石連れまらハ 出を 知識のる傳へハ 衆人又ま
ハ たる 持身法徳の事傳あつても科をまらハ 食く
やうにあつてハ 能る佛のそまきハ 一宗の祖師連の破衣
ありまらハ 疑はまらハ 事ハ 亦移てま
看板のまらハ いたるまらハ 彼法法系をを破成せしは
て彼にまらハ 奉りハ 依ハ 是のわ高ハ 師連らハ 教化
上ハ ありハ 師連らハ 糧ハ 口糧にまらハ 大まらハ 口精
まらハ ありまらハ 師連らハ 依ハ 只死別のらまらハ 破成

と久のき曲まゝくく佛道六別 王道に次ぐ事ある
王及ハ別神たり故に正佛法ハあやうなる事つゝ思ふれ
まゝく考合して正法の伝及にハる事肝要あり

積塔十六日

まゆくやまゝに七巻庵じまゆれり

寛山

人皇五十八代 光孝天皇の御女 雨夜舟親王 亡目にて在せし
に天下の目ばあまを 下して 僧友を あまの 百多を せし
日向大隅 薩摩之國を 元弘の 食料に 賜りし 事
所 息を 備し 事と した 法皇の 存及も 上流にて 日
京 於て 倉後小路 清聚菴にて 奉事あり 供養の 塔を
河原へ 出て 石を 積中 之 出の こと 元弘の 於 授 こと あり
信 隆を 遣 心 事と 元弘の 事と こと 又 元弘の 於に 再 注 此

訓讀會九日

遺教經去

程松明去

洛北 千本塔婆 瑞應山大報恩寺 釈迦堂 奥加秀衝 建立
求法上人 開基 こと 佛の 事と 戒と 釈迦如來 涅槃 に入 あり 時
四十二章經 こと 記 あり こと 事と 列と こと 佛号を
唱へ 十五日の夜 丈炬を 存 佛の 葬式を 行 あり されと
千本のはし ちたの あり こと 法會ハ 東山智積院の 流
信 あり こと 執り あり こと あり

寛原奈去



模加菟原郡菟原神社祭神 天照大神 三箇男神 四皇太后
八幡宮四坐あり 長門國豊浦の神社と曰 住吉九二社の其一
あり 神功皇后釣竿竹社前にあり 又當社の礎石ハ平にて
中々ほくこあり 常に水あり 雨水と湧き 六月未雨をありた
自然と水湧出る 又住吉郡住吉のきく石ハ妻形ありて
さきハ尺余中々海に水四五升あり 又ゆる 日夜干満有と之
則津守御殿のなりにあり

踊念佛

人王五十二代 嵯峨天皇御愛宕 檀林皇太后の御願にて
日辛三代 淳和天皇 天長年中 空海和尚開基にて言
宗之中興王阿上人 異基にて時宗と改 京都寺町 五条西

六ヶ所 御影堂新善光寺にて彼岸中 執行ありあり
信易若史するのち 舟をうづりて 舟以て 堂下号 扇ノ下 八夏

比良八講 北曾

近江国比良嶽比良大明神へ山門のち徒ありて 法華八卷を
讀備 終て後 供作 齋作 法衣丈之の備あり
此系者下知 して 威系者 禱をうて 止は 時 祓 後
布をい 法衣八講の施物と 尺 是 八講 布ト号 又
布施といふ事 是 始あり 又 八講 寺 勅 撰 法 作 始 之 年曆 未考

蠟法 去春

山城國跡見惠日山東福禪寺抄 聖二國師屍山よりて
弘安三年 庚辰十月十六日寂七十九交 後 人王九代花園院
正和元年 國作號を賜ふ 其 國作号の始之 通天の系 其のP二記

淺間祭 六日

駿河府中祭神木花開耶比賣尊 又富士山の吉田大宮口
蹉走口よりてあるくくくハ六月不二坊の条下に志す

聖靈會 廿二日

撰加難波大寺 四天王寺ナリ 志ハ前夏工 金堂の佛舍利を興にすあせ
ある辰時 けしに 樂人乱舞を有り 又聖靈院あり

皇太子御輿に過り 日時に降幸ある 六時堂に
ありて法會あり 衆徒三綱職秋野法印 法服を有り
例を以て 孝子花をかたを 伶人の樂を奏けけし
面を抄出の若を 八部衆といふ法會式 舞樂終りて酒の
内還御ありて 聖靈院にて 又法會舞樂あり

當寺別當略記 兼和年中 八圓行和上 元永年中 大僧正行善
保延年中 行慶仍及 保元年 道慈法親王 四代文武天皇 御宇より王子

友親王と云 女宮を内親王と申す 御姿をわらう ありて法親王と申す 長寛年 竟性法親王
治兼年 明雲法印 壽永年 定惠和尚 建久年中 八

實慶法印 兼元年中 大僧正慈田 又真性大僧正 永仁年
忍性上人 良觀謚 聖應大師 元和年 南光坊 天海僧正 謚 慈眼大師

以下略

三徳藏 秋野坊 人王世二代敏達天皇 春日王子の

作る又日々に河内を伊勢山の巖苔を役傍らありて赤
杖をふたりの若と貝を花に遠くちく一丈三五尺ちくく尺
をを石の玉あついの四方にまて伶人并楽を奏ひ諺に
あれのたその屋を並會とよひは事あり

北野御忌 北野

天満宮と祭り奉る人皇六十六代醍醐天皇の御と祀右大臣
菅原道實公ゆれの内奏よりて筑紫太宰権卒にありて
ゆい 日帝延喜三年二月廿五日筑前國天祥山より昇天
ゆい後山外池によりて六十二代村上天皇天曆三年北野へ
造宮とゆい 日九年謚天満天神と賜るを後 天徳三年
右大臣師輔公再建 祭神 菅公靈神 菅三品子 百祥女

三座 日菅公御忌の法會あり 吉祥院にて菅家の人の事
して法花八講を修行ありて 天仁三年清公詔免ありて

菅右大臣 人皇廿四代仁明天皇 美和十二年降詔 清和天皇
貞觀四年十八方にて文章博士 醍醐天皇 昌泰二年 右大臣 後

三年 日帝 延喜元年筑前國へ元遷 日三年 登天 日四年 北野
へ雷神と祀 日延長九年 木位 天曆元年 神託あり 日三年 社

造宮 日九年 勅號 天満天神 六十六代 一条院 正曆四年 九月 筑前國
大宰府へ 勅使立 大政大臣 正位を賜る 附 御生年 辛丑 誕年ハ

乙の年ゆえ 木見の標を敬也 一 丑年ゆく 牛を飼ふ ちり
うや 花梅ハ 大宰府本社右の方に有り 梅の守とて 靈驗あり

くちりハ け 寧るなり 年と 佐者の法にまよる ねつ 寧のまよ
ゆくハ 又天祥山ハ 大宰府の町より 一里ふと 東にて 楊玉の山にて 形

廣故玉の 粟士山 本名 八粟嶽のこゝ 絶頂の岩の上には 沓の法者

